

他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との関連

金山 富貴子*¹

要 旨： 本研究では、どのような言動の他者を嫌悪しやすいか（他者への嫌悪傾向）と、自分が他者から嫌われるような言動をどの程度行っているか（自己の嫌悪的言動傾向）との関連について、金山（2002）で抽出された嫌悪原因の10の下位側面を用いて検討を行った。他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との相関が全体的に負の値を示していたことから、ある側面で他者を嫌いであるほど自分にはその側面はないと思う傾向が全体的に示された。しかし、「計算高い自己演出」と「横暴な言動」の2側面については弱い負の相関が示されたが、それ以外の側面においては相関が非常に弱かった。これは、本研究で用いた項目が嫌悪原因項目をもとにしてきたため、ネガティブな項目となり、それに対して社会的望ましさの効果が働いたため、自己の嫌悪的言動傾向の平均値が全ての側面において全体的に低くなったからではないかと考えられる。これらのことから、対人嫌悪が類似性効果だけでなく望ましさ効果によって説明される可能性が示唆された。

キーワード： 対人嫌悪、社会的な所属集団、対人嫌悪原因、他者への嫌悪、自己の嫌悪的言動

問題・目的

我々は日常生活の中で様々な他者と関わりあいながら生活している。その中でも、日常においてより多くの時間を過ごすのは、就学者であれば学校、就業者であれば職場など、自分が社会的に所属している集団の中であろう。

社会的に所属している集団の中では、所属する成員の皆が相互に好意的であり協力的であることが理想的であると考えられる。しかし、実際は必ずしもそうではなく、自分が社会的に所属している集団の中でその成員の誰かを嫌いになることがある。

他者を嫌いになった場合、嫌いな相手に対しては、一般的に拒否や回避の欲求や行動が生じる傾向のあることが知られている（齊藤，1990）。しかし、自分が社会的に所属する集団の中で日常接する人を嫌いになった場合には、たとえ相手を嫌いになったとしても、相手との相互作用を避けられず、拒否や

* 1 立正大学心理学部

回避といった行動をとることができないことが多い(金山, 2005)。一般的に、人は嫌いな人と会話を行うことにストレスを感じ(橋本, 1997)、嫌いな人に対しては親和や協力の欲求や行動が低い(齊藤, 1990)ことが知られている。そのため、組織や集団の中に嫌悪対象者が存在する場合には、嫌悪者自身が非常にストレスフルな状況に置かれ、精神的健康に悪影響があるのみならず、周囲の人々にまで悪影響が及ぶ可能性があるであろう(金山, 2003)。したがって、対人嫌悪について、その原因や対処方法などを検討する必要があると考えられる。本研究では、金山(2002, 2003, 2005)と同様に、対人嫌悪事態において嫌う側の人を“嫌悪者”、嫌われる側の人を“嫌悪対象者”と呼んで研究を行うこととする。

従来の研究において人が他者を好きになることや嫌いになることが人格や態度からどのように予測されるかについては、主に対人魅力研究において論じられており(青木, 1994)、これまでに、他者への好意的態度を規定する重要な要因は、身体的魅力(Berscheid & Walster, 1974)、態度の類似性(Byrne, 1971)、他者からの評価(Mettee & Aronson, 1974)、他者の行う自己開示(中村, 1985)などであることが示されている(中村, 1990)。対人魅力研究では他者への好意に直接的な関心が向けられてきたため、嫌悪を直接扱った研究は少ないが、対人嫌悪について考える際に好意に関する知見を援用することが可能であろう。

対人魅力研究において性格特性を扱った研究では、性格特性を示す語に対する好意度の評定や(Anderson, 1968; 齊藤, 1985)、同性あるいは異性から嫌われる人の特徴に関する自由記述によって(豊田, 1998)、一般的に嫌われやすい人物の性格の特徴が検討されている。その結果、齊藤(1985)では、ずるい、ゴマをする、人をさげすむ、意地悪、傲慢などが嫌いな性格特徴の上位となっており、豊田(1998)では、同性に嫌われる男性は、暗い人や自分勝手な人であり、同性に嫌われる女性は、自分勝手な人、ぶりっこな人、異性の前で態度が違う人、性格に裏表がある人、派手な人、自慢屋、自信家であることが示されている。

また、対人魅力研究において行動や態度を扱った研究では、自分に対して好意を持つ相手は好きになるが自分のことを嫌いな相手を嫌いになること(Berscheid & Walster, 1969 蜂屋 1978)、自分を否定的に評価する人を嫌いになることから(Aronson & Linder, 1965)、非好意の返報性があることが示されている。自己開示研究では、時期尚早な深い自己開示は嫌われることが明らかにされている(Kaplan, Firestone, Degnore, & Morre, 1974)。また、自分と相手との態度の類似性は相手への好意と正の相関をもち(eg., Byrne, 1961; Byrne & Nelson, 1965)、数ヵ月後の親密度をも予測することが明らかにされていることから(Newcomb, 1961)、類似性の低い相手は好かれなことが示唆されている。

これらの研究は、一般的な他者や未知あるいは架空の人物に対する好悪を扱ったものがほとんどであるが、金山(2002)は日常の中で実際に生じた対人嫌悪に焦点をあてて、その嫌悪原因について検討を行っている。金山(2002)は、回答者に自身の所属する社会的集団の中に実在する嫌悪対象者を1名想起するよう求め、予備調査を経て選定された嫌悪原因について、その嫌悪対象者を嫌いである原因としてあてはまると回答者が回答した項目について因子分析を行った。その結果、10の嫌悪原因が抽出されている(Table 1)。その嫌悪原因とは、人を傷つけるような無神経な言動などの「横暴な言動」、最低限の礼儀やマナーのない言動などの「マナーの欠如」、自尊心の高さや威張った言動などの「尊

大な言動」、他者からよく思われるような自己演出をするなどの「計算高い自己演出」、全体的に消極的で内向的な雰囲気などの「内向的な雰囲気」、知性の低さや仕事などが不愉快であるなどの「不愉快な言動」、互いの趣味や価値観が合わないなどの「互いの相違」、嫌悪者に対する拒否的な態度などの「私への否定的態度」、外見や服装が魅力的でないなどの「非魅力的な外見」、他者の意向を気にしない関わり方をするなどの「ずうずうしさ」である。

Table 1. 対人嫌悪原因 (金山, 2002) の因子分析において抽出された10因子とその内容

因子名	因子を構成する項目の内容
F1 横暴な言動	人を傷つけるような無神経な言動
F2 マナーの欠如	最低限の礼儀やマナーのない言動
F3 尊大な言動	自尊心が高く人に対する威張った言動
F4 計算高い自己演出	人から良く思われるような自己演出
F5 内向的な雰囲気	全体的に消極的で内向的な雰囲気
F6 不愉快な言動	知性の低さや仕事などに対する不愉快さ
F7 互いの相違	互いの趣味や価値観が合わないこと
F8 私への否定的態度	私に対する拒否的な態度
F9 非魅力的な外見	外見や服装が魅力的でないこと
F10 ずうずうしさ	他者の意向を気にしない関わり方

N = 143

対人嫌悪原因として抽出されたこれらの言動は、一見して非常にネガティブな言動である。しかし、これらの言動は特別非常識な限られた人だけがとる言動ではなく、誰もが日常の中でとっている言動である可能性もある。例えば、人を傷つけるような言動を、気づかぬうちに、嫌悪者も自身が所属する社会的な集団の成員の誰かに対して行っているかもしれない。誰かが労力を払ってしてくれたことに対して感謝の気持ちのない態度をとったり、大事な約束の時間に遅れたりすることも、実は嫌悪者自身も行っているのかもしれない。

すなわち、嫌悪者は何らかの嫌悪原因によって嫌悪対象者を嫌いになっているが、その一方で、嫌悪者自身も誰かから嫌われるような言動をとっている可能性があるのである。そうであるならば、嫌悪者もその誰かにとっては嫌悪対象者となっていることが考えられる。

そこで、本研究では金山 (2002) で抽出された嫌悪原因の10の下位側面を用いて、どのような言動の他者を嫌悪しやすいかと、自分が他者から嫌われるような言動をどの程度行っているかの関連について検討を行うこととする。

対人魅力研究において類似性の効果が態度や属性などの様々な側面において示されていることから、対人嫌悪においては自分と異なる非類似な言動を行う他者を嫌悪することが考えられる。したがって、ある言動をとる他者を嫌悪するほど“自分はそのような言動をとっていない”と回答する傾向がみられることが予測される。本研究では、このような関連がみられるのかどうかについて検討を行う。

方法

1. 調査対象者

東京都内の私立大学生205名 (男性54名、女性150名、不明1名) を対象に質問紙調査を行った。回答

者の年齢は、18～45歳（平均20.44歳、SD=3.30）であった。その中から、年齢が25歳以上であった19名と回答に不備の多かった21名を除く165名（男性44名、女性121名）を分析対象者（平均19.59歳、SD=1.01）とした。

2. 調査方法

2006年1月に、東京都内の私立大学において大学の講義時間を利用して質問紙を配布する集団形式で調査を行い、その場で回答を求め、回収した。所要時間は10分～15分程度であった。

3. 質問紙の構成

質問紙の項目の内容と回答順序は以下の通りであった。

Q1. デモグラフィック項目

調査回答者の性別、年齢について回答を求めた。

Q2. 自分が他者から嫌われる言動をどのくらいとっているか（自己の嫌悪的言動傾向）

他者から嫌われる原因となるような言動を調査回答者自身が日常生活の中で普段どのくらい行っているかを調べるため、金山（2002）で作成された嫌悪原因の66項目を用い、自分の所属する公的な組織・集団の中で、ふだんどのように振舞ったり、どのように自分自身のことを感じているかについて、“全くあてはまらない（1点）”～“非常にあてはまる（4点）”の4件法で回答を求めた。

なお、金山（2002）では、社会的な所属集団における特定の嫌悪対象者のどのようなところが嫌悪の原因だと思うかを尋ねるために、嫌悪原因の項目の語尾を「～なところ」としたが、本研究では自分の普段の言動や振舞いについて尋ねるため、「～なところ」を外して項目を作成した。

Q3. どのような他者の言動を嫌いになる傾向があるか（他者への嫌悪傾向）

調査対象者がどのような言動の他者を嫌いになりやすいかを調べるため、金山（2002）で作成された嫌悪原因の66項目を用い、自分が所属している公的な組織・集団の中に、そのような人物がいたらどのくらい嫌かについて、“全く嫌ではない（1点）”～“非常に嫌だ（4点）”の4件法で回答を求めた。

なお、金山（2002）では、社会的な所属集団における特定の嫌悪対象者のどのようなところが嫌悪の原因だと思うかを尋ねるために、嫌悪原因の項目の語尾を「～なところ」としたが、本研究では回答者自身がどのような人を嫌いになるのかを尋ねるため、「～な人」という表現を用いることとした。

結 果

1. 他者への嫌悪傾向の尺度構成と他者への嫌悪傾向得点および自分の嫌悪的言動傾向得点の算出

まず、回答者が自分の所属集団においてどのような言動をとる人物を嫌いになる傾向があるのか（Q3. 他者への嫌悪傾向）について、金山（2002）の因子分析において抽出された10の下位側面（「横暴な言動」「マナーの欠如」「尊大な言動」「計算高い自己演出」「内向的な雰囲気」「不愉快な言動」「互いの相違」「私への否定的態度」「非魅力的な外見」「ずうずうしさ）ごとに、各下位側面を構成する項目について主成分分析を行い、一次元性の確認を行った。

主成分分析の結果、10の下位側面全てにおいて、各下位側面を構成する項目の全てが第1主成分へ.40以上の負荷量を示していたことから、各下位側面の一次元性が確認された。また、係数を算出したところ、10の下位側面全てにおいて、.70以上の値が得られた。各下位側面の主成分分析の結果と係数を Table 2 に示す（66項目のうち、10の下位側面を構成する項目に含まれなかった項目については、Appendixに示す）。

Table 2 . 他者への嫌悪傾向（Q3）の各尺度の項目内容・主成分負荷量・平均値・標準偏差

横暴な言動 (= .89)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F1	Q3_01_機嫌や都合が悪くなると、表情に出したり周囲にやつあたりする人	.678	3.24	.86
F1	Q3_02_人を見下したりバカにしたような言動や態度をとる人	.823	3.59	.73
F1	Q3_04_人に対して直接、傷つくような悪口や嫌味をずけずけ無神経に言う人	.860	3.66	.69
F1	Q3_05_あなたに人の悪口、批判、噂話など聞いていて嫌になるようなことをよく話してくる人	.734	3.43	.87
F1	Q3_06_皆の前で、本人がいるのに、けなしたりその人が言われたくないようなことを言う人	.806	3.60	.71
F1	Q3_07_皆で話している時、平気で他の人の悪口を言ったりけなしたりする人	.758	3.39	.84
F1	Q3_10_自分の要求や考えを人に強引に押し付ける人	.758	3.47	.78
F1	Q3_30_好きな人と嫌いな人とで態度が違い、好きな人や仲の良い人以外にはそっけない人	.655	3.01	1.02
F1	Q3_64_人を所属や外見、能力などで差別するような言動をする人	.582	3.32	.86
F1	Q3_65_その時々によって気分の波が激しい人	.546	2.93	.94
		固有値	5.282	
		寄与率 (%)	52.816	
マナーの欠如 (= .85)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F2	Q3_13_自分が悪いせいで人に迷惑をかけても、お礼を言ったり謝まったりしない人	.761	3.49	.77
F2	Q3_15_自分にまかされた仕事をきちんとしないで人に迷惑をかけている人	.846	3.45	.78
F2	Q3_17_人から何かしてもらってもお礼や感謝の気持ちがない人	.805	3.55	.69
F2	Q3_18_集まりを休む時などに連絡をしない人	.710	3.26	.91
F2	Q3_19_約束や時間、期日を守らない人	.725	3.17	.93
F2	Q3_33_目上の人に敬語や尊重の気持ちがないなど無礼な態度をとる人	.651	2.96	.97
F2	Q3_63_皆が働いていても自分が疲れたら休んだりして、チームワークを乱すような非協力的な態度をとる人	.654	3.33	.90
		固有値	3.824	
		寄与率 (%)	54.623	
尊大な言動 (= .84)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F3	Q3_08_自分に都合が悪いと、言い訳や正当化をして責任を逃れようとする人	.740	3.40	.79
F3	Q3_09_あなたに対して自分の方が上だというようにいばった言動や態度をとる人	.700	3.48	.80
F3	Q3_11_人の意見を聞き入れず、自分の意見を曲げない人	.805	3.07	.87
F3	Q3_12_しまったかぶりや優秀ぶっている人	.841	3.05	.90
F3	Q3_14_事あるごとにきれいごとや正論を言い、自分は正しい人間であることを示そうとする人	.796	3.08	.94
		固有値	3.025	
		寄与率 (%)	60.499	

計算高い自己演出 (= .89)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F4	Q3_20_自意識過剰な人	.734	2.89	1.07
F4	Q3_21_八方美人で皆にいい顔している人	.817	2.53	1.06
F4	Q3_22_いい子ぶるや悪ぶるなど、自己を演出しているように見える人	.788	2.74	1.07
F4	Q3_23_男女によって接し方が違い、異性の前では格好ついたりぶりっし たり愛想良くする人	.791	2.99	1.02
F4	Q3_24_自分よりも立場が上の人に、やたらと良い態度で振舞っている人	.855	2.82	1.12
F4	Q3_25_自分よりも立場や勢力が上の人を味方につけて自分の立場を有利に する人	.806	2.97	1.00
F4	Q3_27_表ではいい顔をして仲良くしている人の陰口を裏で言っている人	.569	3.42	.83
		固有値	4.159	
		寄与率 (%)	59.408	
内向的な雰囲気 (= .81)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F5	Q3_38_うじうじ自己卑下するようなことを言う人	.688	2.70	.98
F5	Q3_45_外見や雰囲気が暗そうでおもしろくなさそうな人	.805	2.16	1.04
F5	Q3_46_全体的に活力がなく、話し方や態度にやる気がなさそうな人	.841	2.36	1.03
F5	Q3_47_自分から人に話しかけず、皆となじもうという姿勢のない人	.859	2.33	1.10
		固有値	2.567	
		寄与率 (%)	64.169	
不愉快な言動 (= .79)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F6	Q3_34_教養がなく、下らないことを言う人	.759	2.59	1.09
F6	Q3_35_年のわりに言動や考えが幼稚な人	.825	2.55	1.17
F6	Q3_55_目ざわりなしぐさをする人	.796	2.79	1.01
F6	Q3_60_話し方や声が耳ざわりな人	.747	2.52	1.04
		固有値	2.447	
		寄与率 (%)	61.174	
互いの相違 (= .86)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F7	Q3_41_互いの趣味や面白いと思う部分が違い、話がかみ合わない人	.851	2.02	.99
F7	Q3_42_何か一緒に行動する時、あなたとしたいことが合わない人	.867	2.14	.97
F7	Q3_43_性格や気が合わない人	.811	2.59	1.00
F7	Q3_44_あなたと価値観や考え方が合わない人	.852	2.41	1.04
F7	Q3_61_場の雰囲気や周りの人のことを考えず、自分のペースで話したり行 動したりする人	.612	2.75	1.05
		固有値	3.236	
		寄与率 (%)	64.714	
私への否定的態度 (= .85)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F8	Q3_28_他の人とは普通に話すのに、あなたが話しかけた時にはそっけない 態度をとる人	.881	3.33	.89
F8	Q3_29_あなたのことを嫌っていると感じられるような態度をとる人	.919	3.32	.89
F8	Q3_31_あなたに対して拒否や無視など、関係を持つとしないような 態度をとる人	.844	3.05	1.00
		固有値	2.335	
		寄与率 (%)	77.818	

非魅力的な外見 ($\alpha = .82$)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F9	Q3_57_服の趣味が合わない人	.876	1.56	.93
F9	Q3_58_外見や雰囲気有近寄りが見たい人	.860	2.04	1.04
F9	Q3_59_容姿や服装が格好悪い人	.847	1.93	1.02
		固有値	2.225	
		寄与率 (%)	74.158	
ずうずうしさ ($\alpha = .73$)		主成分 負荷量	平均値	標準 偏差
F10	Q3_16_あなたに、自分でできることでもすぐ頼ったり、都合が悪くなると頼ってくる人	.764	3.14	.90
F10	Q3_26_華やかで人気のある人達を仲間にしたたり人気のある集団に入ろうとする人	.742	2.32	1.11
F10	Q3_32_それ程親しくないのにあなたにやたらと親しげに話し掛けたり、べたべたするなど馴れ馴れしい人	.695	2.78	1.05
F10	Q3_56_自分の能力や身内のことなど自慢話ばかりする人	.790	2.99	1.01
		固有値	2.241	
		寄与率 (%)	56.027	

N = 165

本研究における他者への嫌悪傾向の10の下位側面ごとに、その側面を構成する項目の合計点を項目数で割った値を算出し、他者への嫌悪傾向の尺度得点とした。この尺度得点が高いほど、その側面をもつ人物を嫌いであることを示す。各尺度得点の平均値と標準偏差を Table 3 右側に示す。

また、他者から嫌われる原因となるような言動を調査回答者自身が日常生活の中で普段どのくらい行っているか (Q 2. 自己の嫌悪的言動傾向) についても、他者への嫌悪傾向 (Q 3) の10尺度の各々を構成する項目に対応するQ 2の項目の合計点を項目数で割り、自己の嫌悪的言動傾向の尺度得点とした。この尺度得点が高いほど、その側面の言動を自分は普段とらないと回答者が思っていることを示す。各尺度得点の平均値と標準偏差を Table 3 左側に示す。

Table 3. 他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向の各下位側面の平均値と標準偏差

Q2. 自己の嫌悪的言動傾向		平均値	標準 偏差	Q3. 他者への嫌悪傾向		平均値	標準 偏差
Q2F1	横暴な言動	1.51	.44	Q3F1	横暴な言動	3.36	.59
Q2F2	マナーの欠如	1.26	.37	Q3F2	マナーの欠如	3.32	.62
Q2F3	尊大な言動	1.53	.55	Q3F3	尊大な言動	3.22	.67
Q2F4	計算高い自己演出	1.60	.60	Q3F4	計算高い自己演出	2.91	.79
Q2F5	内向的な雰囲気	1.58	.69	Q3F5	内向的な雰囲気	2.39	.83
Q2F6	不愉快な言動	1.35	.48	Q3F6	不愉快な言動	2.61	.84
Q2F7	互いの相違	1.51	.61	Q3F7	互いの相違	2.38	.81
Q2F8	私への否定的態度	1.31	.52	Q3F8	私への否定的態度	3.23	.82
Q2F9	非魅力的な外見	1.39	.57	Q3F9	非魅力的な外見	1.84	.86
Q2F10	ずうずうしさ	1.42	.52	Q3F10	ずうずうしさ	2.81	.76

N = 165

他者への嫌悪傾向の各尺度得点の平均値 (Table 3 右側) については、本研究の理論的中間点 (2.5点)

よりも高かったのは7側面であり、そのうち「横暴な言動」($M=3.36$)、「マナーの欠如」($M=3.32$)、「私への否定的態度」($M=3.23$)、「尊大な言動」($M=3.22$)の平均値が3.0点以上、「計算高い自己演出」($M=2.91$)、「ずうずうしさ」($M=2.81$)、「不愉快な言動」($M=2.61$)の平均値が2.5点~3.0点の間であった。「内向的な雰囲気」($M=2.39$)、「互いの相違」($M=2.38$)、「非魅力的な外見」($M=1.84$)の3側面に関しては、理論的中間点(2.5点)よりも低かった。

このことから、「横暴な言動」、「マナーの欠如」、「私への否定的態度」、「尊大な言動」、「計算高い自己演出」、「ずうずうしさ」、「不愉快な言動」の順に、所属集団の中で一般的に嫌われる言動であることが示された。

一方、自己の嫌悪的言動傾向の各尺度得点の平均値(Table 3 左側)については、10尺度の全ての平均値が2.0以下であり、本研究の理論的中間点(2.5点)よりも低かった(「横暴な言動」($M=1.51$)、「マナーの欠如」($M=1.26$)、「尊大な言動」($M=1.53$)、「計算高い自己演出」($M=1.60$)、「内向的な雰囲気」($M=1.58$)、「不愉快な言動」($M=1.35$)、「互いの相違」($M=1.51$)、「私への否定的態度」($M=1.31$)、「非魅力的な外見」($M=1.39$)、「ずうずうしさ」($M=1.42$))。

このことから、本研究の回答者については自分は普段「横暴な言動」、「マナーの欠如」、「尊大な言動」、「計算高い自己演出」、「不愉快な言動」、「内向的な雰囲気」、「互いの相違」、「私への否定的態度」、「非魅力的な外見」、「ずうずうしさ」といった言動はとらないと評定していたことが示された。

2. 他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向の相関

自分の所属集団においてどのような言動をとる人物を嫌いになる傾向があるのか(Q3. 他者への嫌悪傾向)と、自分自身が日常生活の中で他者から嫌われるような言動を普段どのくらい行っているか(Q2. 自己の嫌悪的言動傾向)とに関連があるのかどうかを検討するため、他者への嫌悪傾向(Q3)と自己の嫌悪的言動傾向(Q2)の下位側面の尺度得点同士について相関係数を算出した(Table 4)。

Table 4. 他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向についての下位側面ごとの相関係数

			相関係数
F1	Q2-Q3	横暴な言動	-.204**
F2	Q2-Q3	マナーの欠如	-.173*
F3	Q2-Q3	尊大な言動	-.103
F4	Q2-Q3	計算高い自己演出	-.219**
F5	Q2-Q3	内向的な雰囲気	-.196*
F6	Q2-Q3	不愉快な言動	-.073
F7	Q2-Q3	互いの相違	-.031
F8	Q2-Q3	私への否定的態度	-.169*
F9	Q2-Q3	非魅力的な外見	-.053
F10	Q2-Q3	ずうずうしさ	-.144 +

$N=165$ ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

その結果、下位側面の全てにおいて、他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向の同一下位側面同士の相関が負の値を示した。しかし、相関係数はいずれも低く、有意であった相関係数のうち「計算高い

自己演出」($r = -.219, p < .01$)、「横暴な言動」($r = -.204, p < .01$)の2つの下位側面において有意な弱い負の相関が示されたのみであった。「内向的な雰囲気」($r = -.196, p < .05$)、「マナーの欠如」($r = -.173, p < .05$)、「私への否定的態度」($r = -.169, p < .05$)、「ずうずうしさ」($r = -.144, p < .10$)の4つの側面においては、有意もしくは有意傾向であったが、ほとんど相関がないことが示された。

このことから、全体的な傾向としては、人はある側面で他者を嫌いであるほど自分はその側面のような言動はとらないと思っているが、それは「計算高い自己演出」と「横暴な言動」の2側面でそのような弱い関連がみられるのみであり、「内向的な雰囲気」「マナーの欠如」「私への否定的態度」「ずうずうしさ」の4側面ではほとんど関連がなく、「尊大な言動」「不愉快な言動」「互いの相違」「非魅力的な外見」ではそのような関連がないことが示された。

考 察

本研究では、金山(2002)で抽出された嫌悪原因の10の下位側面を用いて、どのような言動の他者を嫌悪しやすいか(他者への嫌悪傾向)と、自分が他者から嫌われるような言動をどの程度行っているか(自己の嫌悪的言動傾向)との関連について検討することを目的としていた。

対人魅力研究などで類似性の効果が態度や属性などの様々な側面において示されていることから、自分が嫌悪する言動側面については“自分はそのような言動をとっていない”と思う傾向がみられることが予測された。

その予測を検討するため、他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との関連について検討したところ、ある言動をとる他者を嫌いであるほど自分はそのような言動はとらないと思う傾向が全体的にみられた。しかし、それは「計算高い自己演出」と「横暴な言動」の2側面で弱い相関がみられたのみで、「内向的な雰囲気」「マナーの欠如」「私への否定的態度」「ずうずうしさ」の4側面ではほとんど相関がないことが示された(Table 4)。

このように、本研究において示された他者への嫌悪的傾向と自己の嫌悪的言動傾向との相関は非常に弱いものであった。その原因として、自己の嫌悪的言動傾向の平均値が全体的に低かったことが考えられる。他者への嫌悪傾向については、各尺度得点の平均値から、「横暴な言動」、「マナーの欠如」、「私への否定的態度」、「尊大な言動」、「計算高い自己演出」、「ずうずうしさ」、「不愉快な言動」の順に理論的中間値(2.5点)よりも高く、これらの側面の言動が一般的に所属集団の中で嫌われやすいことが示されている。一方、自己の嫌悪的言動傾向については、全ての尺度得点の平均値が2.0以下であったことから、「横暴な言動」、「マナーの欠如」、「尊大な言動」、「計算高い自己演出」、「内向的な雰囲気」、「不愉快な言動」、「互いの相違」、「私への否定的態度」、「非魅力的な外見」、「ずうずうしさ」といった言動を自分は普段とらないと評定していたことが示された(Table 3)。このことから、自己の嫌悪的言動傾向の平均値が全ての側面において低かったため、相関の値が低くなったのではないかと考えられる。

自己の嫌悪的言動傾向の平均値が低くなったのは、その項目が嫌悪の原因となるような言動をもとに構成されていたため、項目が必然的にネガティブな内容となり、それに対して社会的望ましさが働いたため、“自分はそのような社会的に望ましくないネガティブな言動はとらない”という方向へ回答が偏っ

たからではないかと考えられる。調査の際には質問項目がどのような意味を持つ項目なのかは調査回答者に対して述べられてはいないが、嫌悪の原因として挙げられるような言動の多くはネガティブな内容のものである。そのため、たとえ実際にはそのようなネガティブな言動を自分が誰かに対してとっていたとしても、そのようなネガティブな言動をとっていることを自分では認めず、社会的望ましさに従って回答した可能性があるであろう。

対人魅力研究においては態度や属性などの様々な側面で類似性効果が見られるが、性格に関しては類似性効果だけでなく、社会的に望ましい性格特性の他者を好む望ましさ効果もあることが知られている(奥田, 1997)。本研究で扱ったのは性格特性ではなく言動であったが、言動から性格が推測され、その結果望ましさ効果が生じた可能性もあるため、この点について今後検討する必要があるであろう。

また、本研究で扱ったようなネガティブな言動を自分が実際に行っていたとしても、そのことに自分では気付いていない可能性もある。したがって、自分が嫌悪する言動を自分自身が他者に対してどの程度行っているのかどうかについて検討する際には、自己評定だけでなく、第三者からの評定を用いるなどの方法をとることなども、今後検討する必要があるであろう。

引用文献

- Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 272-279.
- 青木みのり 1994 青年期における対人感情と他者概念との関連 社会心理学研究, 10, 190 - 195.
- Aronson, E. & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- Berscheid, E. & Walster, E., 1969 *Interpersonal attraction*. Addison-Wesley.
- Berscheid, E. & Walster, E., 1974 Physical attractiveness. *Advances in Experimental Social Psychology*, 7, 157-215.
- (パーシェイド, E. & ウォルスター, E. 蜂屋良彦 (訳) 1978 対人的魅力の心理学 誠信書房)
- Byrne, D. 1961 Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 713-715.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Byrne, D. & Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 橋本剛 1997 対人関係が精神的健康に及ぼす影響 - 対人ストレス生起過程因果モデルの観点から - 実験社会心理学研究, 37, 50 - 64.
- 金山富貴子 2002 対人嫌悪原因の構造 日本心理学会第66回大会発表論文集, 140.
- 金山富貴子・山本真理子 2003 嫌悪対象者に対する感情の構造 筑波大学心理学研究, 26, 121 - 131.
- 金山富貴子・山本真理子 2005 所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動 筑波大学心理学研究, 30, 13 - 24.
- Kaplan, K. J., Firestone, I. J., Degnore, R. & Morre, M. 1974 Gradients of attraction as a function of disclosure probe intimacy and setting formality : On distinguishing attitude oscillation from

- attitude change, study one. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 638-646.
- Metee, D. R., & Aronson, E., 1974 *Affective reactions to appraisal from others*. In T. L. Huston (Ed.) *Foundations of interpersonal attraction*. New York: Academic Press. pp.235-283.
- 中村雅彦 1985 対人魅力の規定因としての自己開示 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科編, 32, 201 - 203.
- 中村雅彦 1990 大学生の友人関係の発展過程に関する研究 - 関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討 - 社会心理学研究, 5, 29 - 41.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- 奥田秀宇 1997 人をひきつける心 - 対人魅力の社会心理学 - サイエンス社
- 齊藤勇 1985 好きと嫌いの人間関係 対人感情の心理学入門 エイデル研究所
- 齊藤勇 1990 対人感情の心理学 誠信書房
- 豊田弘司 1998 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 34, 121 - 127.

Appendix. 他者への嫌悪傾向 (Q3) の尺度に含まれなかった項目の平均値と標準偏差

因子 Q3. 他者への嫌悪傾向に関する項目	平均値	標準偏差
- Q3_03_人に暴力をふるったり、物を蹴ったり乱暴な人	3.70	.74
- Q3_36_友達や尊敬する人の服や髪型を何でもすぐに真似する人	2.38	1.14
- Q3_37_あなたの持ち物や髪型・服装などを真似する人	2.48	1.12
- Q3_39_自分にはないものを持っている人をすぐねたんだり、ひがんだりする人	2.88	.98
- Q3_40_あなたをねたむようなことを言う人	2.84	1.07
- Q3_48_全く知らない仲でもないのに、自分を出さない人	2.18	1.02
- Q3_49_あなたとだいぶ仲良くなっているのに自分を出さず、自分のことを話さない人	2.43	1.03
- Q3_50_持ち物、収入、家族のことなどあなたの個人的なことを色々聞いてくる人	2.65	1.10
- Q3_51_それ程親しくないのに、あなたが言われて困るような深い悩みを打ち明けてくる人	2.17	1.04
- Q3_52_相手がお金持であったり育ちが良く金銭感覚や生活観があなたと合わない人	2.19	1.06
- Q3_53_あなたがとても重要視している事柄に関して、認めたくはないが、あなたよりも優れている人	1.93	1.05
- Q3_54_不潔でだらしない格好をする人	2.82	1.02
- Q3_62_自分のことしか頭になく、自分さえよければ他人はお構いなしという言動をとる人	3.30	.89
- Q3_66_あなたの持ち物を勝手に使うなど、遠慮がなさ過ぎるような態度をとる人	3.21	.94

因子「-」は金山 (2002) において回答率が10%以下であったため因子分析に含まれなかった項目であることを示す。N = 165

注：本研究は、平成18年度心理学研究所研究助成を受けて行なわれたものである。